

鷗外全集

第十六卷

第十六回配本（全三十八卷）

鷗外全集 第十六卷

定價貳千圓

昭和四十八年二月二十二日 發行 ©

著 者 森 林 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

鑑定人	ブルヂエ	一
津下四郎左衛門		二七
天 寵		六三
二人の友		八一
魚玄機		一〇一
餘 興		一二一
ぢいさんばあさん		一三一
本家分家		一四三
最後の一句		一五九
白衣の夫人	リルケ	一七七

梶原品	二〇七
高瀬舟	二二一
附高瀬舟縁起	二三六
寒山拾得	二三九
附寒山拾得縁起	二五二
澀江抽齋	二五五
壽阿彌の手紙	五一七
後記	五八五

鑑定人

PAUL BOURGET.

誰でも醫學に興味を持つてゐるものは、いつか大學教授クウリオオル先生の名を聞いた事があるだらう。あの人の書いた精神病学の教科書は随分名高い。丁度ドイツでクレエベリンやクラフト・エエビングが精神病学の權威として認められてゐるやうに、フランスではクウリオオル先生が、此學の大家として崇められてゐる。

此人の立てた「半精神病狀態」と云ふ理論が後世になつてから非難を招く事があるかも知れぬが、兎に角此人の著述は、文章に人を引き付ける力があつて、その叙事はイギリス人の所謂 *anecdote* だと云ふ長所がある。此英語はどうもフランス語で譯する事が出来ぬから其儘使つて置く。此長所から考へて見ると、多分クウリオオル先生の著述は未來に於いても人に棄てられぬだらうと思はれる。

誰でも目のあたりクウリオオル先生を見た人は、決して其容貌を忘れる事は出来まい。一度見れば人の記憶に刻み付けられるやうな容貌である。大男で、髪の色は明色で、金眼鏡を掛けてゐる。ちよいと見るとドイツの學者かと思はれる。併し其眼鏡の背後の目の表情を見ると、ラテン人種だと云ふ事が分かる。

クウリオオル先生の日課は極めて單調である。午前は巴里の町はづれにある病院で働いてゐるのである。午後には刑事裁判所に出勤する。そこには特に病室を設けて裁判所附屬診療所と名附けてある。犯罪者の中

で精神病らしく見えるのがあると、それを先生に観察して貰ふのである。この附屬診療所で、先生は毎週二回づゝ臨床講義をする。そこへ出席するのは、市の醫師と大學の學生とである。それから自宅に歸ると、先生は夜遅くなるまで専門の著述に従事してゐる。

先生がどの位その専門學科に熱心であるかと云ふ事を知るには、先生が患者を取扱ふのを見れば分かる。先生の目には感奮の火が燃えてゐる。先生は正確な診斷を下さうと思つて、緊張と興奮との爲めに震慄してゐる。先生は目前に坐してゐる男女いづれかの患者を、譬へば狩人が獸を見る如く、又探偵が罪人を見る如くに觀察してゐる。

今目前にある患者は何者であらうか。精神病を装ふ罪人であらうか。眞の患者であらうか。その病症はなんであらうか。此等の問題を解決して、診斷を下す時の先生の責任は重大である。先生が二三字の病名又は斷案を書くと、それに依つて被告人は精神病院に送られる事もある。又放免せられる事もある。精神病院に送られる分は、まだ先生の責任が比較的軽い。なぜと云ふに病院に這入つてから患者は今一應診察を受けて、其時クウリオオル先生の診斷が其儘承認せられたり、又は多少變更せられるに過ぎぬからである。よしや先生の診斷が棄却せられたとしても、これが爲めに先生の受ける迷惑は大したものではない。これに反して先生が被告人を健康だと斷定したとする。被告人は實際精神病に罹つてゐるのに、先生がこれを發見し得なかつたとする。さうすると被告人は放免せられて社會へ出ることがある、社會へ出ればその精神病の爲めに又犯罪を働くのである。

先生の額に深い皺の寄つてゐるのはかうした誤診をすまいと思ふからである。社會に對する此責任がある爲に、學術上には興味を以て扱ふ患者が、多少先生の心に苦痛を與へる。

先生はどの患者に對しても、必ず同一の熱心を以て觀察する。其態度は先生の口吻を見れば分かる。先生の聲は患者に何物をも隠させぬやうに患者を探るのである。自分の目前にゐる患者はどれだけの悟性を有してゐるか。又その感覺の能力は如何なる程度にあるか。先生はそれを探らうとして、機嫌を取るやうな、簡単な問を寛かな調子で患者に向つて發する。今も先生はさう云ふ態度で一人の患者を見てゐたが、先生は突然患者の方を背にして、學生の方に向いた。そして云つた。

「ポルトオオ君。君の診斷はどうです。」

「P. I. だと認めます。」學生は遠慮深い調子で答へた。此符牒は病院で使つてゐる Paralysis の略字である。麻痺狂である。

「君はどうです。クルウルボア君。」

「僕は Paranoia と認めます。」此答へは稍自信があるらしく聞えた。病名は偏執狂である。

「わたしの見る所は兩君とは違ひます。」クウリオオル先生はかう云つて置いて、簡単に自分の所見を述べて、患者と引き合せて見せた。此時患者は微笑みつつ先生の詞を聞いてゐたり、又或箇所では立腹したり、又どうかすると冷淡に、どうでも好いと云ふ態度を見せて、自分はうづくまつて人のするが儘になつてゐる。先生は簡潔な詞で既往症を述べた。人の生涯を鋭い短い詞でゑがき出す事は、此先生の長所である。

小説家が人の履歷を話しても、とても先生には及ばない。刑事探偵がどんなに説明しても、先生の詞のやうに、精神病のある犯罪者が行ふ事を一々その動機に溯つて説明する事は出来ない。先生の著眼は一箇條毎に非凡である。複雑な事實の中から、重要な點を引き出して説明するのを聞くと人の心腹に立ち入つて話すかと思はれる。

それが済んで患者は退場した。看護人が連れて出たのである。其時先生は靜に「次を」と云ふ。併し先生の心は靜ではない。次にどんなものが來るかと期待する情が盛だからである。どうかすると次に出て來るのが、非常に珍しい詐病者であるかも知れない。先生の集めてゐる類例の中で出色のものであるかも知れない。要するに先生は類例を集める一種の蒐集家である。先生は待ち遠いやうな表情をして、開く扉を見詰めてゐる。そこへ看護人が次の患者を連れ出すのである。

去年の冬の初である。クウリオオル先生は専門の學科に熱中してゐるだけ、非常に喜ばしい經驗をした。それは數年前に世間で大評判をした犯罪人の事に就いて、先生が鑑定人として面白い判斷をしたのである。犯罪人は名をギヨム・リビエと云ふ。此男はグルノオブルの時計職人を殺したのである。世間では其罪をひどく憎んでゐたが、どうした事か陪審人が情狀を酌量して減刑を申し立てた。リビエは懲役十年になつた。さて懲役になつて間もなくリビエは發狂して精神病院に入れられて、そこに數箇月間ゐて、治癒して監獄署に歸つた。リビエはそこから盛に請願する。大統領宛大臣宛、其外あらゆる官吏宛の請願書を

出す。それに書いてある事は、自分の犯罪は發狂中に行つたので、それが今直つてから分かつたと云ふのである。

此請願書の一通が偶然代議士某の目に觸れた。此代議士は醫師で、特に精神病に興味を持つてゐた。其男が讀んで見ると、請願書が如何にも誠實らしく書いてある。病氣の容體を委しく述べてあるのが如何にも事實らしい。そこで代議士は請願書を取次いで自ら或判事に面會して話をした。判事も成程と頷いた。そこでクウリオオル先生を鑑定人として召喚する事になつた。

或日先生は學生に言つた。「わたしは關係書類を一應調べて見たがね、餘程面白いよ。どうぞ本人が早く見たいものだ。犯罪に先立つ精神状態を書いてゐるのが、精神病學者に書かせてもこれ以上には出來まいと思はれる程だ。本人は指物職で醫學などをした事はない。さうして見ると書いてゐるのは事實かと思はれる。只私には少し疑はしい所があるのだ。」

これを聞いてゐた學生はポルトオオであつた。さうしてかう云つた。「先生の疑はしいと仰やるのは豫審の時に陳述した中に、その精神状態がないからではございませんか。」

先生が云つた。「いや。さうぢやない。豫審の時は本人が自分の精神に異常のある事を知らなかつたのだから、何も云はなかつたとしても不思議はない。殺人をする前に精神病が發してゐて、それを自覺しなかつたと云ふ事は有り得るのだからね。わたしの疑はしいと云ふのはさうぢやない。書いてゐる事が如何にも條理井然としてゐて、驚くほど順序が立つてゐる。それに就いてわたしは或骨董商の詞を思ひ出すのだ。なん

でも贗物は眞物よりは厭に整つてゐるものと、其男が云つた。まあ、少し調べて見なくては。」

次いで附屬診療所の午後の臨床講義にリビエエを呼び出す事になつた。其日も先生はいつものやうに卓に倚つて坐してゐた。さうして日程の紙を見渡して「どれか緊急なのがありますか」と、看護人に言つた。日程には其日に呼び出される患者の名が列記してある。

「いゝえ格別なのはございませんまい。」看護人アベエルは答へた。

「そんならリビエエを呼び出して下さい。」

看護人アベエルは在郷軍人である。今は随分厭な職業をしてゐるのに、いつも赤い、上機嫌の顔に晴やかな表情を見せてゐる。

アベエルは先生の詞を聞いて、昔兵營でしたやうに、舉手敬禮をして患者を連れに行つた。先生はそれを見送つて學生に言つた。「軍隊敬禮の *stéréotypie* だね。」

二分間程立つてアベエルは患者を連れて出た。監獄の服を着た二十五歳の男子である。先生は手眞似で腰を掛ける事を命じた。患者は沈着した態度で這入つて來たが、矢張同じ態度で腰を卸した。さうして先生の顔を探るやうに見た。先生も患者の顔を鋭く見た。

リビエエはかなりの好男子で、顔も上品である。併し表情の缺乏の爲めに不快に見える。顔の筋肉が全然動かない。只假面のやうな顔の中で、目ばかりがあちこち彷徨ふ。譬へば猛獸が係蹄で捕へられて、どうにかして逃げようと思つて、機會を覗つてゐるやうである。

此男は物を云ふ時、少しも顔の表情が變ぜない。丁度木偶の唇だけ動くやうに拵へたのを見るやうに、此男は唇だけ動かす。

リビエエの詞は疾い。さうして其一句一句を殆ど口を塞いだ儘で出す。此單調な陳述をしてゐる間此男は少しも興奮する様子がない。此場に呼び出されてから、此男は最後まで此態度を維持してゐる。

先生は普通の順序に問を發した。「お前はギヨーム・リビエエと云つたね。」

「さうです。」

「お前はグルノオブルの時計職人ジャカンを殺したね。そして其犯罪の爲めに懲役になつて、それから精神病院へ入れられたさうだね。」

「さうです。」

「そこでお前は其犯罪をした時、もう精神病になつてゐたのだと、今になつて云ふのだね。又裁判を受けた時も、精神病の爲めに、辯解が出来なかつたと云ふのだね。」

「さうです。」

「そこで犯罪をした前の心持を、今一度此席で話しておくれ。」

「承知しました。併しそれを申し述べる前にわたくしの母が神経病であつたと云ふ事をお話し申したいのです。どうもわたくしには遺傳があるらしいのです。父は早く亡くなりました。わたくしは母の傍に寝る事になつてゐました。或朝母が大聲に叫ぶので、わたくしは目が覺めました。春の頃で天氣の好い日の朝でし

た。目が覺めて見ると母が明るい部屋の中で痙攣を起して轉がり廻はつてゐます。右の手で胸を抑へてゐて、左の手は引き付けてゐます。わたくしはどうしたのかと思つて大聲で尋ねましたが、母は返事をしません。人事不省になつてゐるらしい見えました。それから母は體が板のやうになりました、吭がごろごろ鳴りました。其内母は目を開きましたが、空を見てゐて、わたくしのゐるのが分かりませんでした。」

「それはヒステリイかね。それとも癲癇かね。」先生はかう云つて問うた。

リビエは答へた。「それは分かりません。併しわたくしは母の様子を見てひどく驚いたものですから、其跡で病氣になりました。暫く立つて母は亡くなりましたが、其時の病氣は肺病でした。それから後もわたくしは母の恐ろしい痙攣を見た時の激動の爲めと見えまして、神経質になつたのが直りません。何事にも感動し易くなりました。丁度犯罪をした六箇月前に、わたくしはなぜか分からずに沈鬱になりました。其頃わたくしの付いてゐた指物職の師匠は好人でした。わたくしは其人の差圖を受けて、なんの不平もなく働いてゐました。其癖わたくしは始終頭痛がして、食が進まず、夜は安眠が出来ませんでした。丁度犯罪をする一週間前に、わたくしの容體はがらりと變りました。わたくしはひどく氣分が好くなりました。其時わたくしは仲間の職人にかう云つたのを覺えてゐます。なんだか世界中が己のものになつたやうだとわたくしは云つたのです。其内容體が又變つて、わたくしはひどく興奮しました。一秒間もちつとして同じ處にはゐられません。なんでも思ふ事が驅競をするやうに變るのですね。わたくしもなんだか變だと思ひました。殊にかしいのは、それまで厭でならなかつた事が、急にひどく爲たくなつたのです。厭で溜まらなかつた焼酎を

わたくしは飲み出しました。それまで見返りもしなかつた女に、わたくしは關係を付けました。犯罪をしたのも矢張り女の爲めでして、其娘はそれまでわたくしと普通の穩な交際をしてゐたのに、わたくしは急に劇しい戀を爲出したのです。丁度わたくしが其娘を連れて散歩をしてジャカンの店の窓の所に通り掛かりますと、娘がそこにあつた時計と鎖とに指をさして欲しいと云ひました。わたくしは是非直にそれが買つて遣りたかつたのです。そこで代價を貸して置いてくれとジャカンに掛け合ひましたが、ジャカンは現金でなくては賣らないと云ひました。其時わたくしはひどく腹を立て、誰かに背後から押されるやうにジャカンに飛び付きました。どうしても血を見なくては氣が濟みません。わたくしはとう／＼ジャカンを殺しました。其時から精神病院を出されるまで、わたくしの精神は譬へば何か布でも被つてゐるやうに、ぼんやりしてゐました。捕縛せられたのも、監獄に這入つたのも刑の宣告をせられたのも夢のやうでした。犯罪をした時から今日までの時間を考へて見ますと、非常に久しい間のやうに思はれます。それから精神病院にゐた間の事はわたくしにはどうしたのだから分りません。ところが或日の朝精神病院で目が覺めて見ますと、わたくしの精神は今日と同じやうにはつきりしてゐました。其時病院の醫員がわたくしの監獄で發狂した事や、其前に犯罪をした事を言つて聞かせてくれました。それから考へて見ますと、どうしてもわたくしは犯罪をした前に發病したに違ひありません。それだからわたくしは調べ直して貰ひたいと云ふのです。」

先生は問うた。「併し今お前が話すやうなわけだと、少し分からぬ事があるぢやないか。お前はジャカンを殺した跡で金庫の錠前を開けて、中から粧飾品や株券を出して取つたのだ。その價格はジャカンの残して

置いた帳簿に據つて計算すると、六萬フランから七萬フランまでの間であつたさうだ。どうしてそんな事をしたのだ。」

リビエは答へた。「えい、さう云ふものが無くなつてゐたと云ふ事は、わたくしも聞きました。わたくしの考では、わたくしは夢中で人を殺して、誰かが跡で物を取つたのでせう。兎に角わたくしの狙つてゐた品物は、女の欲しがつた時計と鎖だけです。其事はわたくしも始終覚えてゐました。なんでも綺麗に物事を忘れてしまつたのは、病院に入れられてからです。」

「そんならお前は物を取つたのは別の人だと思つてゐるのかい。」

「さうです。豫審の時の書類を御覧になつたら分かりますが、わたくしがジャカンの所へ往つたのは午後五時でした。その時刻はしつかり分かつてゐます。それから近所の人がジャカンの店で八時になつても戸を締めず、明りを點けずにゐるので、變だと思つたのですね。それまでの間に、誰か這入つたのだらうと思ひます。空巢狙ひのやうな奴が好機會に乗じて這入つたかも知れません。わたくしはジャカンの死骸をhangmatの上に乘せて置きました。跡から這入つた奴はそれを見たか見なかつたか分かりません。どうとも考へられます。」

「併し鍵はどうしたのだ。ジャカンが持つてゐた鍵を、跡から這入つたものがどうして手に入れたのだらう。」

「それは矢張りどうかして跡から這入つたものが手に入れたのでせう。鍵は帳場にあつたかも知れませ